

トップニュース



荻野昭裕総長

荻野昭裕氏が総長に 全議案の可決後池田氏が辞任

第3033回定期宗会(園城義孝議長)が2月28日から3月8日まで宗務所で開かれ、総務の荻野昭裕氏(和歌山県海南市・浄國寺住職、68歳)が新総長に選出された。総長から門主に辞表が奉

呈されたことが報告された。新年度の宗務の基本方針や予算を審議する今回の宗会では、門主が指名された荻野氏と池田氏(栃木県那珂川町・慈願寺住職、70歳)

の2人を候補者に、出席議員70人が投票。荻野氏が27票を獲得し、新総長に決まった。この後、荻野新総長が挨拶し、「微力ながら、このたび議決いただいた明年度の宗務の基本方針と予算を粛々と執行していきたい」と述べた。

荻野総長は3月11日、日谷照應、三好祐祐、弘中貴之の各氏を総務に、加藤尚史、大河内隆之の両氏を副総務に選んだ。(次号詳報)



倒壊の恐れがある自宅から納屋に運び出された仏壇

揺れが収まった後、敷地内の別荘で暮らす長男の寿也さん(52)、友美さん(52)夫妻と無事を確認し合い、津波に備えて車で高台に避難。相次ぐ強い余震におびえながら、車中で一夜を過ごした。自宅はかろうじて倒壊を免れたが、縁側は屋根から崩れ落ち、ガラス片や壊れた家具などが散乱し、住める状態ではなかった。2人は金沢市で働く寿也さんが同市に借りた一軒家で約1カ月間、避難生活を送った。自宅に戻ったのは2月5日。被害をほとんど受けていなかった隣の空き家(親

能登半島地震で自宅が大きな被害を受けた石川県七尾市能登島長崎町の出村又幸さん(79)、潔子さん(73)夫妻(同市・浄尊寺門徒)を2月28日に訪ねた。2人は現在、自宅隣にある空き家(親戚宅)で暮らし、同居していた長男家族とは離ればなれとなっている。地震からの2カ月間を聞いた。

震度6強の激しい揺れで、築150年を経た木造平屋建ての自宅は、屋根の一部が崩れ落ちた。揺れが収まるのを待ったという2人は「今までに経験したことがない激しい横揺れ。2人とも家の下敷きになってしまつたと覚悟した」。家が壊れる音のほか、バリバリという不気味な音が聞こえた。居間の天井が崩れたら駄目だと思つたと振り返る。

能登半島地震 門徒を訪ねる 出村又幸さん 潔子さん 夫妻 (石川県七尾市・浄尊寺門徒)



築150年を経た出村又幸さん宅は縁側が剥がれ落ちるようになり崩れた

類宅で生活しながら、家の片付けを始めた。又幸さんは8日から、自宅前の県道に倒れ込んだアロック扉の取り除き作業に取りかかった。1人で行う姿を見つめたのが、浄尊寺(勝尾寺)の住職、能登島長崎町での片付け作業に向かう能登半島地震支援センター(金沢市・金沢別院内)のスタッフ。又幸さんの様子を聞き、勝尾住職とスタッフがすぐに又幸さんの元に駆けつけ、電動ハンマーでアロックを細かく砕き、県道から撤去した。同時に、又幸さんからは「家はいつ倒れるかわからない。何とか今の間に仏壇を出したい」という依頼を受けてその場にいた仏壇の職員と一緒に仏壇を搬出。被害が少ない納屋に仮安置した。

2月28日は七尾市の蓮照寺(河野誠住職)で、倒壊した鐘樓の解体作業が行われた(写真)。作業には、能登半島地震支援センター(金沢市・金沢別院内)からボランティアなど6人が出た。地震後、ずっと仏壇のことが気になって

「お仏壇を仏間に収めるまでは」

心の依りどころ。この前に座り手を合わせていると心が落ち着く」と安堵する。現在、寿也さんと孫娘は金沢で暮らし、友美さんは被書少なかった実家(能登島別荘)で避難生活を送る。家族が離ればなれとなり、先行きが見えない不安を抱えるが、又幸さんは「これから先どうしようかと思うことがあっても、何かあれば手伝います」といふも声をかけてくれる浄尊寺さんのおかげで少しずつ気が持てるようになってきた。阿弥陀さまに見守られながら

法蔵館 花まつり特集

絵ものがたり 正信偈
絵ものがたり 正信偈2
まんが正信偈のおはなし
正信念仏物語
やさしい仏教の話
子どもに聞かせたい法話

浄土真宗聖典 改訂五十三刷

大無量寿經 読本1
大無量壽經 読本2
大無量壽經 読本3

本願寺新報

hongwanji journal

3月20日(水曜日)

毎月1日・10日・20日発行

発行所 本願寺新報社
京都市下京区堀川通花屋町下ル 浄土真宗本願寺派(西本願寺) 千600-8501 本願寺出版社内
電話 075(371)4171(代) / FAX075(341)7753

茶道 敷内家燕庵

京都市下京区西洞院正面下ル
http://www.yabunouchi-ennan.or.jp

- ### 私たちのちかい
- 一、自分の殻に閉じこもることなく 穏やかな顔と優しい言葉を大切にします 微笑み語りかける仏さまのように
 - 一、むさぼり、いかり、おろかさにならせず しなやかな心と振る舞いを心がけます 心安らかな仏さまのように
 - 一、自分だけを大事にすることなく 人と喜びや悲しみを分かち合います 慈悲に満ちみちた仏さまのように
 - 一、生かされていることに気づき 日々を精一杯つとめます 人びとの救いに尽くす仏さまのように

元日の午後4時10分に起きた「令和6年能登半島地震」。新幹線で鹿児島の実家に帰る途中だった。実家のテレビから見る被災地の映像に胸が締め付けられる思いがした。▼近年、多くの災害が日本各地で起きている。鹿児島市や鹿児島県始良郡(現在の始良市や霧島市)を襲った「平成5年8月豪雨」は、地元で起きた災害として記憶に強く残る。8月6日の豪雨が特にひどかったため「8・6水害」とも呼ばれている。▼鹿児島県内で71人の犠牲者が出る大災害で、実家周辺もひどい雨に見舞われた。当時4歳。父の運転する車に乗って保育園から帰る途中、家の前の道路は水に浸かり、大人の腰ぐらいの高さまで水位が上がってきただけ。それを見た時の恐怖は今もよみがえってくる。自分ではどうすることもできない不安を感じていた私を、父は肩に載せ、茶色く濁った水の中を歩いて家まで連れて帰ってくれた。あの頼もしさは今も脳裏に焼き付いている。▼被災者への取材で共通して聞くことは、被災の恐怖や悲しみは記憶から決して消えないこと、助けに来てくれた人への恩を強く思っておられること。そして支援者の中にもそれを聞く。ボランティアや支援物資を届ける僧侶や門信徒の中にも被災体験をした人は少なからずいるからだ。「全国の皆さんに助けていただいた恩がある。次は私たちの番」と語られる。恩は次の人へと伝わっていく。そのつながりは、恐怖や悲しみの闇の中に輝く光だと感じる。